

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 橋本 雄一

学位申請者 平原 真紀

論文名 「楊家将演義」小説研究－『北宋志伝』と『楊家府演義』を中心に－

結論及び審査の経過

平原真紀氏から提出された博士学位請求論文「「楊家将演義」小説研究－『北宋志伝』と『楊家府演義』を中心に－」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

平原氏在学中に指導委員会を結成していた、村尾誠一（主任指導）・柴田勝二・橋本雄一の3名で事前審査を行い、いくつかの修正を経て論文の提出及び審査へ進むことが可能との結論を得た。論文提出後、学内から、三宅登之・野平宗弘を加え、橋本雄一を主査として5名により審査委員会が構成され、公開審査が行われた。

論文の概要

中国近世における演義小説の代表的な作品でありながら、日本における注目度が低い、「楊家将演義」について、その小説としての成立・性格と、江戸時代の日本における受容について考察した論文である。楊一族の武将譚を扱った現存の小説としては最古である明代の16世紀末から17世紀初頭の万暦年間に刊行された『北宋志伝』（『南宋志伝』との合刻で『南北宋志伝』と称する場合もある）と『楊家府演義』との両板本を取り上げ、両書の違いを明らかにするとともに、編者・原話（共通底本）・成立の問題を明らかにする。その後、この小説が江戸時代日本に伝来したかを実証的に確かめた上で、滝沢馬琴『椿説弓張月』への影響関係を考察する。

以下、提出された論文の目次を示した上で、章を追いながら内容を概観する。

序章 本研究の目的と論文構成

第一章 「楊家将演義」小説に関する史実と先行研究

第二章	二系統の明刊本「楊家将演義」小説の板本とプロット
第三章	二系統の明刊本「楊家将演義」小説における共通底本の可能性
第四章	二系統の明刊本「楊家将演義」小説の基本問題
第五章	明刊本「楊家将演義」小説再考
第六章	近世日本に於ける「楊家将演義」小説の伝来
第七章	『椿説弓張月』と二系統の「楊家将演義」小説
終章	「楊家将演義」小説研究の総括

序章においては、本論文の課題が示され、以下展開する各章において提起する問題が示される。第一章では、楊家の人々に関する史実の確認と、宋以後元代までの楊家の武将に関する説話等の展開を概観する。その上で、「楊家将演義」小説に関する先行研究を検討し、明刊行の二系統の板本の内容が混同されていること、その前後関係が明らかにされていないことと原話の問題、さらに、二系統の複雑な関係を生み出すそれぞれの編者の意図の解明という、三つの問題を導き出す。この問題について、第二章から第五章までにわたり見解が示されることになる。

第二章では、それぞれの系統の現存板本の悉皆調査の結果を示すと共に、二つの系統のプロットをまとめ、共通プロットと非共通プロットに整然と整理することを得て、研究者においても両板本の内容が混同されているという混乱状況を解決に導いた。第三章では、先行研究を基に、両板本のうち『北宋志伝』が先行するとの見解に立ち、前章でのプロット分類を承け、両系統に共通するプロットの詳細な検討から、共通する同一説話の底本を用いたことを実証しながら、その受容の仕方には差があることをも示す。第四章では、両系統の、特に楊一族の人々の系譜や描き方の相違に注目し、史実に忠実であろうとする『北宋志伝』と意図的に改変する『楊家府演義』との姿勢の違いに着目する。さらに、挿入詩について、原本から忠実な『北宋志伝』と、押韻などを崩しながらも改変する『楊家府演義』との相違を明らかにする。第五章では、『北宋志伝』は福建の辣腕編集者熊大木による作品であり、大衆に好まれる形で構成されていることを明らかにする。対して『楊家府演義』の編纂者紀振倫は、官途に恵まれない下級文人であり、学術的な傾向とともに伝統的な士大夫としての嘆きと憤慨が反映していると論じる。紀振倫のそうした傾向は、世から必ずしも迎えられず、後世に「楊家将演義」といえば、『北宋志伝』を専ら指すような状況となることを指摘する。以上で、二系統の板本の「楊家将演義」小説の三つの問題についての見解が示される。

その上で、第六章、第七章では、日本への伝来が吟味される。第六章では、近世期の日本には「楊家将演義」小説は伝来していないという説もあるが、当時の外国書の日本への流入は、長崎出島で完全にコントロールされていたことを手がかりに、関係資料を悉皆的

に調査することにより、18 世紀後半の安永・寛政の時代には、二系統の板本が日本に伝来していたことが確かめられた。さらに、滝沢馬琴に受容の跡が見え、特に、『椿説弓張月』冒頭の「題詞」15 首の内 13 首が『南北宋志伝』からのものであることを解明し、少なくとも馬琴はこの小説を享受していたことを明らかにした。そして、第七章により、その『椿説弓張月』における二系統の小説の受容を検討し、特に『楊家府演義』からの受容の跡を明らかにし、馬琴と振倫との共通性にも説き及んでいる。

最後に終章を置き、今まで述べてきたことをまとめるとともに、今後の展望も示している。

審査の概要及び論文の評価

頭記の通り、平原氏在学中の指導委員会による事前審査の後、2021 年 3 月 29 日に、論文審査を経て口述試問が遠隔会議システムにより公開で行われた。

論文の概要に示した通り、この論文は、「楊家将演義」小説の明代における二系統の板本についての悉皆調査を経て、それぞれの板本を厳密に翻訳した上で、成立の前後関係・プロットの相違・共通底本の存在など、基底的な問題に対して、先行研究も十分に参照しながら、妥当な見解が示されている。また、江戸時代における日本への伝来についても確実な証拠からその可能性を示し、江戸文学の代表的な作品の一つである滝沢馬琴の『椿説弓張月』におけるその小説の受容についても妥当に実証されている。中国文学研究と和漢比較文学研究との双方に学術的な貢献度の高い優良な成果だと認められる。

このように判断できる根拠を以下の 4 点に渡り記すことにしたい。

- 1, 『北宋志伝』および『楊家府演義』の板本を悉皆的に調査したこと。その上で善本を底本に、全体を精度の高い日本語に翻訳し、作品の内容の分析に及んでいる点。
- 2, 混同されがちな『北宋志伝』と『楊家府演義』の全体の構造を、プロットをしっかりと読み解くことにより、妥当に整理し、その異同を整然と提示した点。
- 3, 両系統の編者である熊大木と紀振倫の作者像を明らかにし、創作姿勢の相違を妥当に捉えている点。
- 4, 江戸期の輸入された書物の検閲から流通までの過程を的確に捉え、それぞれ確実な資料を博捜することにより、両系統の板本が江戸時代（18 世紀後半）の日本に流入したことを実証的に明らかにした点。
- 5, 江戸時代の読本の基準作の一つである滝沢馬琴の『椿説弓張月』における両系統の板本の受容を明らかにした点。これは、強い影響力を持つ先行研究への的確な批判であり、馬琴研究の上でも重要な成果である。

無論、この論文に問題がないわけではない。以下、口述審査で指摘された点を摘記して

おく。

1, 先行研究の成果を尊重するのは当然であるが、特に1章から4章までは、その態度が過度に出てしまい、先行研究を批判し、さらなる独自な見解を導き得る調査結果や手のかかる作業結果を提示しながらも、その提示の仕方が遠慮がちとなり、先行研究に多くを拠っているという印象を持たせてしまうのは残念である。

2, 板本の悉皆調査は貴重な成果だが、板本は1点1点特徴がある場合もある。したがって、版毎に一括するだけではなく、調査した本について1点ずつの書誌を記述してほしかった。また、板本の刊行順序については、重要な問題であり、先行研究を承ける形でその順序を確定させているが、先行研究に拠るにしても、その根拠は改めて示してほしかった。

3, 両板本の内容の違いについての整理は十分になされて、それぞれの編者の態度の相違は明らかにされているが、両者の小説としての作品論的な探求はもっとなされてもよいのではないか。熊大木については「編集者」、紀振倫に対しては「編纂者」と書き分けているが、その書き分けの所以も説明して欲しかった。

4, 全体に「ではないだろうか」と言うような表現が多く見られ、膨大な時間を要した調査や作業を経た結果であることは明白なのだから、もう少し自信を持った文体で書かれるべきであろう。

5, 決して多くはないのだが、誤植や誤訳も見られ、そのあたりは改善されたい。

さらに、口述試験では、5章までの明代小説の問題と、6章・7章との関連についての質疑もなされたが、他の委員からも、日本における注目度の低さという問題との関わりから当然必要な議論だとの見解も示された。また、共通「底本」という用語（先行研究でも使われている）について、問題はないかとの指摘もあり、様々な説話等が異なりの多い本文を生成させる『平家物語』の研究が、用語なども含めて参考になるとの指摘もあった。さらには、両板本が編まれた北方と南方との問題、また、ベトナムにおける中国通俗小説受容の問題など、様々な話題が展開した。

これらの批判や提言にも、誠実な受け答えがなされ、豊かな学術討論の場となった。言うまでもないことが、以上の問題点は、論の深化のためにそれぞれ重要な点ではあるが、今後の更なる展開のために投げかけられたものであり、成し遂げられた成果を否定するものではない。よって、審査委員会は一致して、最初に述べた結論に達した次第である。